

序

私は一昨年夏内閣を退いて小閑を得たので、池田政権の発足から退陣に至るまでのメモアールのようなものを記してみたいと思っていた。そしてそれは池田政権の足跡を記す記録となり、池田政権がその時々の特長において生じた諸問題に、どのような座標をもって対処したかを回顧してみることにもなるかと考えた。

ところがいよいよ筆を執ってみると、日々の雑務に災されるのと、頭がとかく散文的になっておるので、筆自体の運びが必ずしも順調ではなかった。それに資料としては簡単な日程表と有力紙の縮刷版が手許にあるだけで、材料の上からもメモアールをものするには大きい制約があった。そうこうしている中に、私は長男を奪われたばかりか、当の池田さんは病気になるって政権の座を退かれ、遂には不帰の客となられることになった。私の心の支えはかくてもろくも崩れ去ってしまった。しばらくは古い原稿を見ることさえ避けてしまふ始末であった。

しかし私の手許には、過去十年余りの間に、新聞や雑誌の需めに応じて書いた随想のようなものが残つてゐる。一方私は友人知己に対して随分と永い間御無沙汰つづきである。そこで私は当初の構想を改めて、池田政権の若干の思い出に、これらの旧稿のうち捨て難いもののいくつかを加えて一つの本にまとめ上げ、御懇誼を頂いてゐる方々に贈呈してはと考え直した。あたかも次男裕が公子を迎えて新家庭をもつことになり、わが家にも久しぶりに春がめぐつてきたので、その挙式の日までにと思つて急いで上梓したのがこの小著である。

この上梓に當つて、私は故池田勇人先生から受けた深い恩顧を改めて反すうすると共に、鹿島研究所出版会社長鹿島守之助氏および関係者の方々の暖かい御配慮と私の秘書野原寛君の行き届いた協力を深厚な謝意を表したい。

日本の現代政治の一つの断面と、その断層ににじむささやかな苦悶を少しでも判読していただければ望外の幸せである。

昭和四十一年十月十四日

木郷千駄木の自宅にて

大 平 正 芳